



Title	西洋人キャラクターを中心とした役割語としてのカタコト日本語の研究：表現手段の変遷と二次的ステレオタイプ
Author(s)	依田，恵美
Citation	大阪大学，2015，博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/53880
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 （ 依 田 恵 美 ）	
論文題名	西洋人キャラクタを中心とした役割語としてのカタコト日本語の研究 —表現手段の変遷と二次的ステレオタイプ—
論文内容の要旨 本論文は、役割語の観点から外国人キャラクタのセリフに充てられるカタコトの日本語を考察し、その表現手段の特徴と、使用の背景を明らかにするものである。外国人キャラクタの役割語とは、どのような表現手段が用いられているのか、表現手段はどのような変遷をたどってきたのか、発話者にどのようなイメージを付与するのかをマンガや小説などをデータとして考察し、外国人キャラクタにカタコト日本語を充てる背景に日本語母語話者のどのような実態が反映されているのかを述べる。そして、日本語母語話者が外国人に向ける序列の意識を背景とする「二次的ステレオタイプ」の過程によっても、役割語が形成され得ることを指摘する。 本論文は以下のように構成される。 第1章では、本論文の研究基盤となる複数の概念についてまとめ、役割語研究の意義を述べる。また、外国人キャラクタにカタコトの日本語が充てられる前提としてどのようなことが想定されているのかについても述べる。 まず、役割語とは、特定の言語的特徴が特定の社会属性を表象するものである。したがって、特定の言語的特徴が特定の個人を想起させるものとは分けて考える必要がある。役割語は、個人の知識が共同体の共通知識、つまりステレオタイプとなることで、表象する人物像の伝達・受容が可能になり、人物像を伝達・受容・理解するうえでの経済性に貢献する。役割語としての機能が顕著である要素は、一人称代名詞と終助詞も含めた文末表現である。そのため、役割語を運用する際には、一人称代名詞と文末表現を、人物像に合う形で組み合わせることが必要になると考えられる。役割語研究は、文学作品などの伝達・受容の際に必要となる、共同体における共通知識を扱うものである。共通知識を分析することで、日本語母語話者の実態に迫ることを目的としている。役割語を研究対象とすることの意義は、従来の日本語史研究では扱われてこなかった側面の分析が可能になり、より多角的な日本語史の把握が可能になる点であると考えられる。 マンガや児童小説に登場する、見た目が外国人である人物の発話と、彼らの周囲にいる日本人キャラクタの反応を見てみる。すると、外国人キャラクタの発話に関して「容姿が日本人に見えないキャラクタは外国語を話すこと」、あるいは、「外国人キャラクタが日本語を話す場合はカタコトであること」を前提として物語が構成されていることがわかる。外国人キャラクタの発話としてカタコトの日本語が充てられる背景には、このようなステレオタイプが存在すると考えられる。 次に、ポライトネスとは、コミュニケーションにおける対人配慮の手段を指す概念である。個人が持つ「フェイス」に対する侵害リスクの度合いによって、直接的な表現が選択されたり、間接的な表現が選択されたりする。 以上を基盤として外国人キャラクタの役割語を考察することで、日本語母語話者が外国人に向けるまなざしの実態が明らかになると考えられる。 第2章では現代において、外国人キャラクタを担う役割語としてどのような表現手段が用いられているかを実例を挙げて述べる。すなわち、終助詞「ね」の誤用、助詞の消去、モーラの挿入／消去、外国語の挿入、カタカナ表記の変則的な使用の5つを見ていく。そして、第3章で行う考察の足がかりとして、カタコト日本語を話す外国人キャラクタと、カタコト日本語を話さない外国人キャラクタとを比較し、カタコト日本語が付与する人物像は主人公と切磋琢磨する発話者には該当しないものであることを指摘する。 第3章では、第2章で提示した、カタコト日本語は主人公と切磋琢磨する発話者には不適当であることをふまえ、カタコト日本語が付与するイメージを歴史的に考察する。本論文では特に、西洋人キャラクタの場合を取り上げる。戦前から戦中、戦後に世に出た小説や映画、マンガなどに見られる発話を比較・考察し、西洋人キャラクタについて、陽気さや剽軽さと結びついていること、他の表現手段に比べ、早くから敬体が充てられてきたこと、また、陽気さや剽軽さを付与することで、発話者の持つ正体を隠す「能ある鷹は『カタコトで』爪を隠す」の構図が利用されてきていることが明らかになる。さらに、近年では、外国人キャラクタを「かわいい」と捉える傾向が見られるようになって	

ていることを、外国人キャラクタを主人公とするマンガを例に示す。そこでは、カタコトの日本語を話す外国人キャラクタが「かわいい」「幼い」といったことばで形容されている。そのように「かわいい」と捉える背景の一端として韓流スター／アイドルの発音が幼児語を想起させ、幼さと結びつくことの関わりを指摘する。

第4章では、外国人キャラクタの役割語において、出身地域が西洋であるか、東洋であるかによって、文末表現に敬体が充てられるか、常体が充てられるかの違いが見られることに着目し、その役割語の相違が何を反映したものであるのかを述べる。

まず、東洋人キャラクタがどのような日本語を話すものとして捉えられているのかを、**2012年**に公開された映画を資料として示す。そこでは、東洋人キャラクタの日本語は、カタコトの段階では「常体」であり、日本語が上達すると「敬体」を身に付けるものとして捉えられている。このことは、東・東南アジアを中心に普及を見せる日本語教育の実態に反するものであり、役割語の保守性が働いていることを示唆する。東洋人キャラクタを常体話者として結び付けるイメージには、現実世界において、出稼ぎ労働者の存在などを背景として東洋人を日本人より下位と捉える序列の意識が関与していると考えられる。日本語を学ぶ目的で来日したのではない場合、周囲の日本語母語話者が自分に向けて話す日本語をインプットとして、外国人が日本語を身に付けるという過程があると推察される。その場合、インプットを与えることになる日本語母語話者は、常体の日本語で話す。これは、日本人の、東洋人を下位と捉える序列意識から、ポライトネスにおけるフェイス侵害リスクが小さいと見積もられ、より伝達の効率性を図った直接的な表現が選択されるためであると考えられる。そのようなインプットを受けた外国人が、インプットを反映してどのようなときでも常体で話すと、日本人にとっては常体と敬体の使い分けに対応していない不完全な日本語を話しているという印象となり、その印象が共通知識となることで東洋人を「常体話者」と捉えるステレオタイプができあがると考えられる。このような、日本語母語話者が発した日本語の反映が発話者である外国人の人物像となる過程を「二次的ステレオタイプ」と呼ぶ。

一方、西洋人キャラクタは敬体話者として捉えられている。これは、戦後、日本人の序列意識において西洋が上位と捉えられ、フェイス侵害のリスクが大きく見積もられたために、日本語母語話者がより遠隔的な表現を用いて接したことに端を発する「二次的ステレオタイプ」によるものであると考えられる。

つまり、外国人キャラクタの役割語が洋の東西によって異なる当て方をされることの背景には、戦後の日本が他国をどのように捉えてきたかが関与しており、日本語母語話者が外国人に向かって用いた日本語が、二次的に「敬体西洋人 対 常体東洋人」というイメージの二項対立を生じさせたと言える。この考察を根拠に、役割語の生み出される過程として「二次的ステレオタイプ」という新しい観点を提示する。

さらに、以上をふまえ、明治期の外国人キャラクタにおいても話しことばに敬体と常体の使い分けが見られることの理由について、現代の場合と同様に、それぞれの外国人に日本人がどのような接し方・序列化を行ったかが関わっているとする仮説を提示する。

第5章では、第1章で確認した役割語のうち、非日本語が挿入された日本語の例として〈西洋人語〉「おお・ああ＋人物」の文型を取り上げ、明治時代の翻訳劇での翻訳状況を手がかりにして形成過程を述べる。そして、「おお、ロミオ!」という文句が、もともと日本語にはない文型であることから、使用されるたびに日本語母語話者に異文化接触を生じさせ、〈西洋人語〉の確立・普及を担っていることを指摘する。

第6章では、第1章から第5章までは役割語を用いる日本語母語話者についての考察であったことから、ここで視点を変え、外国人にとって外国人キャラクタの役割語がどのように捉えられているのかを考察する。留学生を対象としたアンケート結果を基に、役割語の理解度に日本語学習歴や日本滞在年数は関与しないこと、女性語の理解度が高いこと、外国人像を担う役割語では非日本語を挿入する形式の理解度が高いこと、先行研究では役割語の知識習得にアニメやドラマの果たす役割を重視しているが、学習者が役割語を学ぶうえで映像と音声が一度に提示されるアニメを情報源とした場合、何度も登場する特定の人物の特定の言い回しが記憶され、ことばの特徴と特定の個人を結びつけるにとどまる可能性があることを指摘する。また、以上の考察をふまえ、役割語の知識を学ぶための資料にどのような要素が望まれるかについて私見を述べる。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (依田 恵美)			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	大阪大学 教授	金水 敏
	副 査	大阪大学 教授	岡島 昭浩
	副 査	大阪大学 准教授	矢田 勉
論文審査の結果の要旨			
以下、本文別紙			

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：西洋人キャラクターを中心とした 役割語としてのカタコト日本語の研究
—表現手段の変遷と二次的ステレオタイプ—

学位申請者 依田 恵美

論文審査担当者

主査 大阪大学教授 金水 敏

副査 大阪大学教授 岡島 昭浩

副査 大阪大学准教授 矢田 勉

【論文内容の要旨】

本論文は、「役割語」としての外国人のカタコト日本語について理論と歴史的記述の両面から分析したものである。まず第 1 章では「役割語」の概念について整理し、役割語研究の意義を述べる。また、本論文の理論的基盤の一つである「ボライトネス」の概念についてもふれる。さらにマンガに登場する中国人の例を手がかりに、外国人像にカタコト日本語が結び付けられる理由を考察し、日本語母語話者に「外国人が話す日本語はカタコトである」とするステレオタイプが共有されていることを述べる。

第 2 章では、現代において、外国人像を担う役割語としてどのような表現手段が用いられているかを実例を挙げて述べる。そして、カタコト日本語を話さない外国人との対比から、カタコト日本語が付与する人物像は主人公と切磋琢磨する発話者には該当しないものであることを指摘する。

第 3 章では、カタコト日本語が付与するイメージを明らかにする。外国人像のうち、特に西洋人のものを取り上げ、陽気さや剽軽さと結びついていること、早くから敬体を当てて表現されてきたこと、また、陽気さや剽軽さを付与することで、発話者の持つ正体を隠す効果があることを述べる。さらに、近年見られるようになった外国人像をかわいいと捉える傾向を指摘し、その背景の一端に言及する。

第 4 章では、役割語において、外国人の登場人物であることは同じであっても、出身地域が西洋であるか、東洋であるかによって相違が見られることを述べる。そして、そのような使い分けが見られる理由として、戦後の日本が他国をどのような序列で捉えてきたかが関与していることを指摘する。その際、「ボライトネス」の概念を援用する。さらに、明治期の外国人像においても話しことばに現代と同様の使い分けが見られることの理由について、現代の場合と同様に、それぞれの外国人に日本人がどのような接し方を行ったかが関わるという仮説を述べ、これを「二次的ステレオタイプ」として提起する。

第 5 章では、第 2 章で確認した役割語のうち、外国語が挿入された日本語の例として〈西洋人語〉「おお・ああ+人物」の文型を取り上げ、明治時代の翻訳劇を手がかりにして形成過程を明らかにする。そして、「おお、ロミオ!」というパタンがもともと日本語にはない文型であることから、〈西洋人語〉の確立・普及に繋がっていることを指摘する。

第 6 章では、留学生を対象としたアンケート結果を基に、日本語学習者における役割語の理解度を考察する。アルベケル・内川・角田（2008）の調査結果との比較も行い、以下のことを述べる。すなわち、女性語の理解度が高いこと、外国人像を担う役割語では非日本語を挿入する形式の理解度が高いこと、学習者が役割語を学ぶうえで映像と音声が一度に提示されるアニメを情報源とした場合、何度も登場する特定の人物の特定の言い回しが記憶され、ことばの特徴と特定の個人を結びつけるにとどまる可能性があることである。さらに、第 6 章での考察結果をふまえ、役割語学習に貢献する資料にどのような要素が望まれるかについて私見を述べている。

A4 判 160 頁。公刊論文 4 本および口頭発表 4 件を基盤とし、さらに書き下ろしを含んでいる。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、役割語（発話者の人物像と結びついた発話形式のステレオタイプ）研究に新しい知見を付け加えた。まず、日本人にとって外国人はカタコトの日本語を話すというステレオタイプが存在することを指摘した点である。これは、カタコトを期待される外国人が流暢な日本語を話すと、周囲に驚きや違和感を与えるという描写の存在から示されている。さらに、そのカタコトの特徴は、話し手の外国人が西洋人か東洋人かという違いによって分化する傾向があることも示された。もっとも大きな違いは、西洋人は敬体（丁寧・丁寧語使用）であるのに対し、東洋人は常体（丁寧・丁寧語不使用）の傾向が強いことである。その要因を申請者は第 2 次世界大戦後の日本の社会状況に求めている。すなわち、終戦直後日本はアメリカの占領下であり、連合国側の外国人＝西洋人は日本人より強い権力を持っていたため、日本人は西洋人に対し敬体で話すことが多かった。その結果西洋人は敬体を学習する機会が多いため、敬体を中心に学習したであろう。一方戦後日本社会の中で東洋人は必ずしも十分な日本語教育を受ける機会を持たず、厳しい労働環境の中で働かされることが多かった。その結果、東洋人は敬体を学習する機会が十分でなく、最低限の言語運用で日々の生活をやりくりせざるを得なかった。こういった状況がステレオタイプ化し、それぞれの役割語となったというものである。このように、日本人側の発話から出発する言語のステレオタイプのあり方を、申請者は「二次的ステレオタイプ」と呼んだ。二次的ステレオタイプの考え方は、一部の役割語の形成過程を考える上で今後重要な鍵となっていくものと期待され、この点をとってみても本論文の研究史に対する貢献度が評価できる。

しかし、なおいくつかの課題も残されている。まずその「二次的ステレオタイプ」の適用範囲をどこまでとするか（例えば幼児語における母親の発話の扱いなど）、また何が「二次的」なのかということも含めた命名の妥当性が十分検討されていない。常体・敬体の対立の発生基盤を主に戦後の日本の状況に求めた点も疑問が残る。すなわち、先行研究で明らかにされている幕末から戦前の状況の中でも、西洋人のカタコトやピジンは一貫して敬体を使用するように描写されていたのに対し、中国人は特に大正年間以降、常体で描写されることが多くなった。この状況と戦後との接続があるのかないのかという問題はさらに検討されなければならない。歴史的資料の扱いに不十分あるいは適切性を欠く箇所が見られること、第 6 章の内容が他の章に対して幾分異質であり、また統計処理にも問題が残されていること、第 5 章の「おお+人名」の類型はカタコトと言うよりは翻訳文型の問題であり、カタコトと翻訳はむしろ相補分布の中で考えなければならないこと等も指摘できる。

このように、未だ解決されない問題が内包されてはいるものの、やはり本論文は当該の問題を扱う研究の中では優れた成果を示しており、博士（文学）の学位論文として十分な水準に達しているものと結論づけられる。